

令和2年度 活動報告

研究部

令和2年度は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う休校期間（令和2年3月～5月）に始まった。通常実施される例月の部会はオンラインで限定的に実施し、予定していた研究活動が大きく制限された。

1 中止となった活動

- ・研究部ワークショップ（例年7～8月実施）
- ・研究発表会・公開授業（例年2月実施）
- ・第70回全英連大会（東京）分科会における研究発表（11月）

2 例月の活動

毎月の部会は実施しなかった。5月に部長・副部長会議、月例会をリモートで実施。9月に実会場で部会を実施した。その後、部内の分科会ごとにリモート会議やメールで話し合いを重ねた。

3 本年度の研究内容： テーマ「研究部基本語い1200と語い指導再考」

新学習指導要領を見据えて2つのテーマで研究し、その内容を研究部のホームページにて報告した。

「研究部基本語い1200」は、令和元年度、検定教科書で使用される語いから1200語を選んで作成した。さらに、生徒同士の即興的なやり取りで使用される語いを調査し、1200語がどの程度含まれるかを調査した。そして、令和2年度は、生徒同士による「即興的な活動で言えた語について、考えられる理由」を教師と生徒を対象に調査した。生徒は辞書や配付されたハンドアウトを参考にすることが明らかとなり、また、テレビ番組、映画、インターネット動画等が、語い習得に効果があると推測される結果を得た。

「語い指導再考」では、部員の語い指導の実践をNationのfour strandsに照らし合わせて分類した。教師が授業内で十分なinputを与えようとするため、言語要素に焦点を当てた指導が多く、産出に焦点を当てた指導が少なかった。また、効果の検証として生徒がスピーキング活動、ライティング活動でoutputした表現をまとめ、生徒にその語いを使えた理由を調査したところ、教科書で習った表現を多く活用することが分かった。新学習指導要領での指導が始まり、指導する語い数が増えても、音声→文字の順で指導し、Nationの唱えるfour strandsをバランスよく取り入れながら定着を図る活動を行い、教科書の表現や使いたい表現を使わせることで、今後も生徒の語いの定着を図ることが可能であると考えられる。

（研究部長 文京区立本郷台中学校 溪内 明）